



Data

監督：三池崇史
 脚本：八津弘幸
 原作：東野圭吾『ラプラスの魔女』
 (角川文庫刊)
 出演：櫻井翔/広瀬すず/福士蒼汰
 /志田未来/佐藤江梨子/
 TAO/玉木宏/高嶋政伸/檀
 れい/リリー・フランキー/
 豊川悦司

■ショートコメント■

◆公式ホームページによれば、本作の「イントロダクション」は次の通りだ。

2015年に執筆30周年を迎えた東野圭吾が発表した『ラプラスの魔女』。「これまでの私の小説をぶっ壊してみたかった」という自身の発言のとおり、その異色かつ野心的な内容は、多くの読者を驚愕させた。そして2018年、この規格外のベストセラーを映画化した『ラプラスの魔女』がついに公開を迎える。謎大木事件の調査に当たる生真面目な大学教授・青江修介を演じるのは、4年ぶりの英が単独主演となる、櫻井翔。自然現象を予言するヒロイン・羽原円華には、広瀬すず。円華が探している失踪中の青年・甘粕謙人に、福士蒼汰。人気絶頂の3人の俳優が本作で初共演を果たす。さらに、豊川悦司、玉木宏、リリー・フランキー、高嶋政伸、壇れい、志田未来、佐藤江梨子、TAOと言った実力派人気キャストたちが集結。監督は、鬼才・三池崇史。超豪華な製作チームが日本映画界に仕掛ける今年最大の衝撃作『ラプラスの魔女』がGWを席卷する！

◆公式ホームページによれば、本作のストーリーは次の通りだ。

初老の男性が妻と訪れた温泉地で、硫化水素中毒により死亡した。事件の担当刑事・中岡は、妻による遺産目当ての計画殺人でないかと疑いを抱く。警察からの依頼で事故現場の調査を行った地球科学の専門家・青江修介教授は、「気象条件の安定しない屋外で、致死量の硫化水素ガスを吸引させる計画殺人は実行不可能」と断定、事件性を否定した。それから数日後。別の地方都市でも硫化水素中毒による死亡事故が発生、その被害者が前回の事故で死亡した男と顔見知りであることが判明した。青江は新たな事故現場の調査に当たるが、やはり前回同様、事件性は見受けられない。

遠く離れた場所で同じ自然現象による事故が連続して起こり、被害者が知人同士だった…
…この事実は、単なる奇妙な偶然なのか？だが、もしこれらが事故でなく、連続殺人事件と仮定するのであれば、犯人は【その場所で起きるすべての自然現象をあらかじめ予測していた】ことになる。そんなことは絶対に不可能だ。未来を予見する知性＝「ラプラスの悪魔」など現実に存在するはずがない……。行き詰まる青江の前に、1人の女が現れた。彼女の名は、羽原円華。事件の秘密を知る人物・甘粕謙人の行方を追っているという。怪しむ青江の目の前で、円華は、これから起こる自然現象を言い当ててみせた。円華の「予知」に隠された秘密とは？甘粕謙人とは何者なのか？そして動き出す、第三の事件……。青江の想像をはるかに超える、おそろべき全貌とは！？驚愕と衝撃の結末に向けて、彼らの運命が大きく動き始めた。

◆密室でもないところで人間を硫化水素中毒死させることは可能なの？地球化学の研究者である大学教授・青江修介（桜井翔）はそれを否定し、ある温泉で起きた「不審死」の「事件性」を否定したが、さて…？さらに、別の温泉地で同じような不審死が起きると…？
そんな問題提起は面白いが、そもそも硫化水素中毒死とはどんなもの？私にはそれがサッパリ！そのため、本作のテーマとなる「自然現象の予測と人為化(?)」の理解がイマイチ…。

◆さらに、「ラプラスの悪魔」って一体ナニ？それもかなり難解だ。ストーリーの進行につれてそれが少しずつ解明されていくが、それについていくのは結構しんどい。三池崇史監督の演出によって、豊川悦司、玉木宏ら脇役を固めるベテラン俳優陣の存在感は光るが、肝心の謎解きの主役となる桜井翔と広瀬すずの存在感はイマイチだ。

さらに、三池崇史監督が珍しくケレン味のない正統派の演出をしている(?)が、そのことの是非も含めて、さてあなたの本作の評価は？

2018（平成30年）年3月28日記